夏草―「おくのほそ道」から　松尾　芭蕉　〔第 5 ／5 時〕

平成 27 年 11 月 16 日（月） 5 校時
岩国市立岩国中学校　3 年 1 組
指　導　者　　池藤　壮士

1　主眼

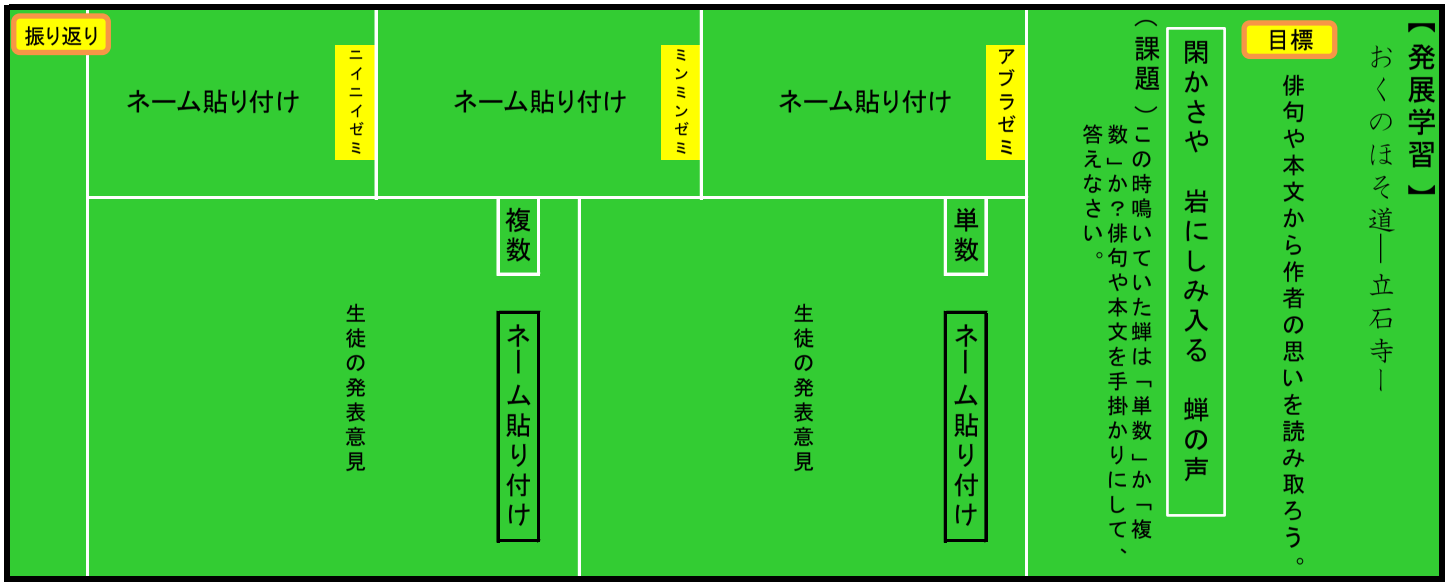
俳句に使われている表現に着目し、それを根拠として俳句の情景をイメージすることを通して、作者のものの見方や感じ方を読み取ることができる。

2　指導上の留意点

（1）導入
・ワークプリントのウォーミングアップをする。
・電子黒板を使って導入部分を説明する。
（2）本時の目標・課題の把握
・ワークプリントで本時の目標と課題を説明する。
・俳句に使われている表現や本文（原文）をヒントにしながら読むことを伝える。
（3）「おくのほそ道」－立石寺－を音読する。
・起立して音読し、読み終えた者から着席するよう指示する。
・音読終了後、本文内容(現代語訳）をワークプリントを用いて簡単に確認する。
（4）「蝉の声」の種類について検討する。
・電子黒板を用いて、３種類の蝉を紹介し、その鳴き声を聞かせる。
・ネームプレートを黒板に貼らせ、数名に理由を発表させる。
（5）「蝉の声」の大きさについて検討する。
・ワークプリントに示した「単数」「複数」の割り当てと協同学習の活動の仕方について説明する。
・生徒の進捗状況に応じて、本文（原文）や俳句の表現を参考にするように伝える。
・机間指導により個別に生徒を支援する。
・理由発表の際には、その内容に応じてを得点カードを示しながら、タイムリーに評価する。
（6）振り返り
・本時のまとめをする。
・ワークプリントに振り返りを記入させる。

【評価】

俳句に使われた言葉を吟味することで、そこに表出する作者のものの見方や感じ方を読み取ることができたか。



本時の流れ

（1）導入

・ワークプリントのウォーミングアップを使って、本時の学習内容の導入部分を学習する。

（2）本時の目標・課題の把握

・ワークプリントで本時の目標と課題を把握する。

中心発問　この時、鳴いていた蝉は「単数」か「複数」か？

（3）「おくのほそ道」－立石寺－の本文を音読する。【一斉学習】

・本文を音読する。（起立して読み、終わった人から着席する。）

・難語句の意味を含めて、本文内容を簡単に確認する。

（4）「蝉の声」の種類について検討する。【個別学習】

・電子黒板で示された３種類の蟬の声を聞き、この句に最もふさわしいと思われるものを１つ選ぶ。

・ネームプレートを黒板に貼る。全体の選択状況を確認する。

（5）「蝉の声」の大きさについて検討する。【個別学習・協同学習】

・どのくらいの「蝉」が鳴いていたのかを考える。（割り当てられた立場(「単数」または「複数」)に立ってその理由を考える。）

・同じ立場の人を探し、意見を交換し合う。

・書き出した理由を発表し合う。（挙手による発表・指導者による指名）

・最終的な自分の立場(意見)を決定する。

（6）本時のまとめと振り返り

・本時のまとめと授業の振り返りをする。

板書型指導案　　防府市立桑山中学校　　山本佐智子

1　主　眼

表現に注目して、作者の心情に迫り、読みを深めることができる。

2　指導上の留意点

「捨てられない」根拠を詩のどこから感じるかを問うことでボタンに惹かれる「僕」の思いに迫らせる。

3　評　価

言葉の響きやリズムを大切にして音読することができたか。（関心意欲）

表現に着目して、作者の心情に迫り、読みを深めることができたか。（理解）

(めあて)表現に注目して、詩を読み深めよう

月夜の浜辺　　中原中也

月夜の晩に　ボタンが一つ
波打ち際に　落ちていた、

満月に照らされる浜辺
静寂・孤独

捨てられないボタン

それを拾って役立てようと

僕は思ったわけでもないが

なぜだかそれを捨てるに忍びず

僕はそれを袂に入れた

月に向かってそれは抛れず

浪に向かってそれは抛れず

指先に沁み、心に沁みた

月夜の晩に　拾ったボタンは
どうしてそれが捨てられようか

・繰り返し
・七音のリズム

本時の流れ

①範読を聞きながら情景をイメージする。

②情景を思い浮かべながら音読。
後追い読み→一斉

③詩全体の雰囲気を一言で表現する。
「忍びず」「袂」「抛れず」などの意味を確認する。

④自分ならボタンを拾うか拾わないか？理由も説明させる。
「僕」はこれから先もボタンを捨てられないであろうことを押さえる。

⑤
「僕」がボタンを捨てられない証拠を詩の中から見つけよう

課題を意識して一斉読み
ワークシートに書き込む→グループ→発表
詩全体で「ボタンを捨てられない」思いが綴られ、繰り返すことでその思いが強められていることを押さえる。

⑥
拾ったボタンがどうしてすてられないのか想像してみよう

ワークシートに自分の考えを書く。
時間があれば数名発表

⑦まとめ

⑧振り返り
学習の振り返りシートに記入させる。

中学校国語科（３年１組）　　「　未来へ向かって　『聴くということ』　　」

柳井市立柳井西中学校
指導者　教諭　中　本　昌　恵

１　主　眼

「聴き方をどうすれば話し手が話しやすいか」について考え、話し合いの中でお互いの意見をよく聴き、自分の考えを話すことができる。

２　準備物

ワークシート、ホワイトボード、イレーザー、マジック

３　指導上の留意点

①　筆者の言葉を自分なりに解釈し、それを班の話し合いでふくらませるようにさせる。

> **相手の鏡になる**ということは、そのまま相手の言葉を返すということだから優しい口調で返してあげたらいいと思うよ。

②　共感や相槌のある話し合いになるよう、机間指導で言葉をかける。

③　筆者の考えに納得がいかない場合も受け入れ、根拠をもとに話し合いをさせる。

> **聴きながら言葉を継ぎ足すのは、よくないかもしれないけど、気持ちを整理してあげることができるんじゃないかな。**

評価　「聴き方をどうすれば話し手が話しやすいか」について、お互いの意見を聴き自分の考えを話すことができたか。

聴くということ　　**鷲田清一**

めあて　聴き方をどうすれば、話し手が話しやすいかを話し合おう。

【聴くということ】
・受動的な行為
・選択的な行為
・相手の言葉をきちんと受け止めること
・相手の鏡になろうとすること

1班	3班	5班	7班
2班	4班	6班	8班

話し手が話しやすい聴き方とは？
例　相手に寄り添い、きちんと言葉を受け止め、言葉につまってもじっと待って、安心して話せるような聴き方。

本時の流れ

①　本時の流れを確認する。

めあて

聴き方をどうすれば、話し手が話しやすいかを話し合いましょう。

◆前時のアンケートでお互いの感想が書いてあるワークシートを配付し、今日のめあてについて知る。

②「聴くということ」について鷲田さんは、どのような行為だと言っていたか　本文を読んで確認する。

鷲田さんは「聴くということ」をどのようにとらえていましたか。

③鷲田さんのとらえ方を具体的な態度として考えさせる。（個人）

④個人で考えたものを四人班に分かれて話し合い、ホワイトボードにまとめさせる。（班活動）

⑤まとめさせたものを黒板に提示し、全体で検討する。

◆気づきや、もっと知りたいことなどを発表する。

話し手が話しやすい聴き方は、次のようになりますね。

◆黒板に集約したものを提示する。

⑥学習を振り返る。

◆振り返りプリントに記入させる。

国語科（１年１組）　　単元名　古典「とらわれた心に突き立つ矢―宇治拾遺物語」

日　時　平成２７年１１月１７日（火）５校時

指導者　周南市立太華中学校　　柏　村　純　子

１　主　眼

語り手の批評を読み解くことを通して、作者が私たちに語りかけていることを、今の自分とつなげてとらえ、「書く」ことで表現することができる。

２　準備物

学習プリント、ホワイトボード、短冊黒板、プレート（人物、最後の２文、めあて、ふり返り）、ふり返りシート

３　指導上の留意点

①「無知」と「慮り」の意味を考える上で、聖と猟師の人となりや行動に着目させる。

②他の説話集を例に挙げることで、本文にない最後のまとめを想像しやすくさせる。

③説話集のもつ教訓的な部分が、今の自分たちの実生活とつながっていることを感じさせる。

評価

語り手の批評を読み解き、作者が語りかけていることを今の自分とつなげてとらえ、書くことができたか。

十一月十七日

とらわれた心に突き立つ矢『宇治拾遺物語』

聖・猟師・語り手

めあて　語り手の批評から、作者が語りかけていることをとらえよう。

聖なれど無知なればかやうに化かされけるなり。

・法華経を信仰
・立派な人
・人がよい

・物事に夢中になりすぎて周りが見えず判断力を失うこと。
・信じるだけで、自分で考える力がないこと。

猟師なれども慮りありければ、狸を射殺し、その化けを現しけるなり。

・聖を尊敬、援助
・学問していない
・殺生する

・自分を客観的に見られること。（無知の知）・疑問をもつ力
・確かめる力・目の前のことを判断する力があること。
・思慮・考慮

◎本文の最後に教訓を加えてみよう！◎

・一つのことに懲りすぎて周りが見えなくなってはいけない。
・真実を見抜く目をもとう。

＊短冊黒板をホワイトボードに貼る。

◎あなたはこの教訓をどう思いますか？◎

・共感する？共感できない？
・立場を決めて、理由と共に書こう。

ふり返り

本時の流れ

①本文を、歴史的仮名遣いと会話主に気をつけて、音読する。（１２分）
◆聖・猟師・語り手に分かれて音読させる。
◆読み終わった後、概要を確認する。

②最後の二文に着目する。（５分）
◆範読後、全員で音読させ、めあてを提示する。（→学習プリントを配布）
◆聖と猟師の人となりについて確認する。

③**無知**と**慮り**の意味を考える。（８分）
◆「なれば」と「ありければ」の意味から、無知と慮りが、後に続く言葉の理由となっていることを確認する。
◆無知について、辞書の意味ではうまく説明できないことを指摘する。
◆意見を発表させ、まとめる。

④作者が語りかけていることをとらえる。（１２分）
◆他の説話集の教訓を思い出させる。
◆自分が親だったらどう語るか考えてみるよう助言する。

本文の最後に教訓を加えてみよう！

◆本文に付け加える形で、作者の意図を書かせる。
◆「無知」の意味を入れて書くよう指示する。
◆グループでまとめ、ホワイトボードに短冊黒板を貼らせる。

⑤最後の一文を今の自分とつなげて考える。（１０分）

あなたはこの教訓をどう思いますか？

◆共感するか、共感できないかの立場を明確にし、理由と共に、二段落構成で作文する。

⑥ふり返りをする。（３分）
◆ふり返りシートに、今日の授業で学んだことを書かせる。

○単元　いにしえの心と語らう　○教材　夏草～おくのほそ道～
○平成２７年１１月６日（金）５校時　３年３組
○指導者　金田博文
○準備　「楚良日記」の一節、ワークシート、
　　宿題になっていた各自の修学旅行作文

１　主　　眼

虚構を挿入した芭蕉の思いにふれることを通して、虚構手法を用いて文章を変化させる楽しみを味わうことができる。

２　指導上の留意点

（１）分節２（課題２）をしっかり考えさせてこそ、ジャンプの課題で、虚構挿入のアイディアのレベルが保障される。

（２）既習事項（芭蕉の人間観と無常観）を活用することでも、平泉の文章に虚構を求めた芭蕉の思いに導きたい。

（３）平泉の文章は「風景」のみならず「**情景**」である（書き手としての楽しみ）ことを押さえる。

（４）ジャンプの課題で、「虚構」を取り入れるときの文章の目的（おもしろくするのか、美しさを伝えるのか、事実を印象的に伝えるのかなど）をはっきりさせた上で推敲させる方が、文章の何がよくなったのかが評価しやすい。

（５）ジャンプの課題は、難しいと思われる課題だが、取り組めない生徒を教室の一角に集めて、「あなたの作文に、先生だったらこういう虚構を盛り込む」のアイディアを例示してみたい。

評　　価

・「虚構を交え」たり、「推敲を重ね」たり、「詩を挿入し」たりする手法を体験し、文章創作の楽しみを味わえたか。
（書く）
・芭蕉の創作への執念を、改めて確認できたか。（読みとる）
・次時の、他者との文章交流を楽しみにしているか。
（関心・意欲）

めあて…松尾芭蕉を取り入れて、あなたの作文を変化・アップさせよう

＜松尾芭蕉＞
①執念→「推敲」
②特色→「文章と詩の融合」
③工夫→「（虚構で盛る）」

課題１…『楚良日記』とのちがい
・経堂は閉まっていた
・光堂と経堂の回った順
・雨だったのか、晴れていたのか

課題２…芭蕉が虚構で発生させた効果
・経堂と並べた上で、光堂を際立たせる。
・霧雨が降っていた方が、光堂の輝きが美しい。
・展開をドラマチックにする。
・自分の理想の平泉を文章の中で味わいたい。

課題３…（生徒の句作をピックアップしていく）
・金色の　五月の海に　シャツのまま
・遠影に　海の路より　思いはせ
・夏風や　見上げる空に坂の町
・碧海や　きみあたへしは　絆なり
・にほふ海　皐月客人　無常かな
・蒼天を　きらめく粒と　友の笑み

まとめ…文章を推敲し、工夫していく楽しさ

本時の流れ

1　めあての確認、及び
教科書p150～p155に見られた、芭蕉が創作で行った既習事項を確認

2　共有の課題（４人組）
①『楚良日記』と比べることにより、芭蕉の文章に虚構が混じっていることを見つける。
②虚構を取り入れた芭蕉の意図や、その効果を、四人で自由に考えてみて、じっくり話し合う。

3　ジャンプの課題（４人組）
・自分の修学旅行記に、適切な虚構を盛り込む。四人で互いに読み合って、アイディアを提供し合う。
・ただおもしろくしようとするのではなく、書き手としての明確な意図のある虚構を。
（次時に意図を説明できるように）
・挿入した虚構は、その意図に効果的であったのか、次時に他者に評価してもらう。

4　まとめ・ふり返り
○文章を変化させる楽しみ（虚構や他者のアドバイスで）が本時にあったか、ワークシートに記入する。

中学校国語科（１年６組）　「いのち」　　下関市立長府中学校　　指導者　教諭　川口由美子

1　主眼

構成を考えることを通じて作者の意図に迫ることができる。

2　指導上の留意点

①前時の最後の板書をワークシートに印刷しておく。

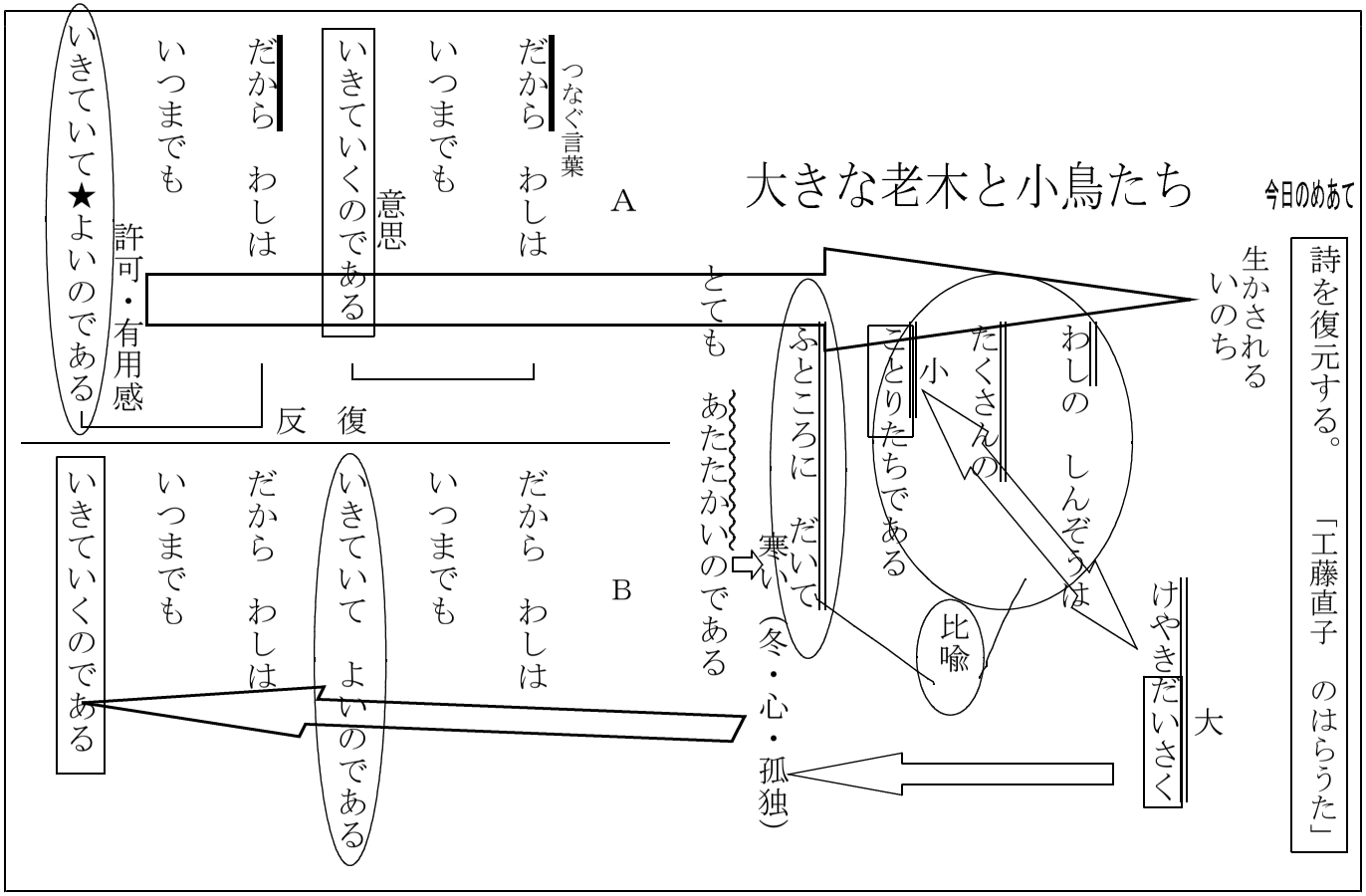
②一行ごとにカードを作成し黒板に貼っていき、後半の構成に焦点化する生徒の発言を引き出す。

③意見交換の際、比喩法（擬人法）、反復法、接続詞、対比、ことばの結び付き、表記、文末表現、韻律等、出た意見を板書に加える。

「いきていく」「いきていてよい」の意味の違い、前半との対応、音読を必要に応じて手立てとする。

④「題名」「語り手と作者」の視点を与えて比較させことで詩の主題に迫らせる。

⑤ワークシートに書かせ、教え合わせ、教師がまとめる。



本時の流れ

①前時の復習をし、本時の学習内容を知る。

②確定できる表現を吟味する。【発問：この作品にふさわしい表現はどちらだろうか】

③考えを作品の言葉を根拠に発表し、クラスで一つの作品を完成させる。

④原作と比較し、作者の意図を考える。【発問：作者はなぜこの表現にしたのだろうか】

⑤「わからないこと」を振り返り、班で学び合う。

萩市立萩東中学校　指導者　内田　京子

中学校１年国語科「シカの『落ち穂拾い』―フィールドノートの記録から」辻　大和

霜月　十八日（水）

めあて　図表を使って筆者が伝える考えを読み取ろう。

学習課題　あなたも動物生態学者！
二つのグラフから読み取れることを関連させて、「落ち穂拾い」が生じる時期の特徴を３文で説明しよう。

「観察から分かったこと」【事実】

①「落ち穂拾い」は３月から５月にかけての春に集中していた。【図１】

②シカは十六種二十二品目の食物を採食している。【表１】

「仮説」【筆者の考え】

《筆者の工夫》
△「落ち穂拾い」に出会った回数
◎　出会った回数を総観察時間で割って、時間あたりの回数。

文章と図表とを関連づける必要性

一　春は、シカの本来の食物が不足している。

二　サルの落とす食物のほうが、栄養価が高い。

「仮説の検証」【事実】

イネ科の草の量は夏から秋にかけて多く、その後急激に減少する。【図２】

シカが「落ち穂拾い」で採食した食物のほうが、シカ本来の食物より、含まれるエネルギーの量が多い。【表２】

検証結果

「落ち穂拾い」が多く生じる春は、シカの本来の食物が不足している時期である。

サルの落とす食物は、シカの本来の食物よりも栄養価が高い。

本時の流れ

①各教科の授業で、グラフを取り扱った場面を思い起こす。【全体（３分）】

二つのグラフから読み取れることを関連させて、「落ち穂拾い」が生じる時期の特徴を三文で説明しよう。

②「図１　落ち穂拾いに出会う割合の変化」と「図２　イネの供給量の変化」の二つのグラフを関連させて分かることを、ワークシートで文章にまとめる。【一人学び（５分）】

③友だちと記述の視点、記述の仕方を確認し合う。【グループ（10分）】

④グラフから読み取ったことをホワイトボードで説明して、全体で共有する。【全体（10分）】

筆者は、何のために、この二つのグラフを提示したのだろうか。

⑤教科書本文「観察からわかったこと～仮説の検証」を読み、筆者の思考の過程を確認する。【ペア読み（４分）】【グループ（10分）】

⑥「表１」「表２」について、どのように説明されているか確かめる。【全体（５分）】

⑦授業評価の記入をする。【個別（３分）】

◆自由記述欄には、図表の効果を書かせる。

１　主　眼

２つのグラフから得た情報と文章を関連させて、事実と筆者の考えを読み取る。

２　指導上の留意点

①　導入の思い起こしでは、国語科でグラフを取り扱うことへの意識付けと、各教科の学習との連動のため、できるだけ多く発言させる。

②　「図１」「図２」の二つのグラフがともに横軸が月を表していることから、山の位置のずれに気付くようグラフをプロジェクターで提示し、重なり方を比較させる。

③　グラフから読み取った内容の記述を生徒相互で推敲し、より伝わりやすい表現を工夫させる。

④　読み取った内容と筆者の叙述とを比較し、整合性を確認させる。

⑤　記録文としての筆者の叙述の展開に着目させる。

３　評価

２つのグラフから読み取れることを関連させて、３文で書くことができたか。